

第1回国際シンポジウム（大阪）記録

パネルディスカッション

日時：2010年8月22日（日） 14.50～16.00

場所：大阪市立住まい情報センター ホール

パネラー：

ディルク・シューベルト（ハンブルク・ハーフェンシテイ大学教授）

ハンス・ヨアヒム・レスナー（steg 代表）

クルト・ラインケン（steg 不動産開発部門責任者）

谷口 靖弘（大阪芸術大学短期大学部教授、大阪・九条下町ツアー主宰）

大場 茂明（研究プロジェクト代表・大阪市立大学教授）

司会：高梨 友宏（大阪市立大学准教授）

高梨：時間もまいりましたし、準備が整いましたので、そろそろパネルディスカッションに進みたいと存じます。改めてパネラーの皆さんをここで紹介させていただきたいと思えます。発表の順番なんですけど、一番向こうにお座りいただいております、シューベルト先生、HCUの教授でいらっしゃいます。どうぞ拍手をお願いいたします。ありがとうございます。そしてお隣がレスナーさん。Stegの代表でいらっしゃいます。Stegについては午前中のご発表で少しご説明がございましたけども、都市更新開発機構と日本語ではできるかと思えます。Stegの代表でいらっしゃいます。それからお隣は、第二部の最後にご発表頂きましたけども、同じくStegのラインケンさんです。それから、このシンポジウムのオーガナイザーでいらっしゃいます、大阪市立大学文学部の教授でいらっしゃいます、大場茂明先生です。それから最後になりました、すみません。谷口靖弘先生ですが、大阪芸術大学・短期大学部の教授でいらっしゃいます、観光学の先生でございます。私最後になりました、申し遅れましたが、大阪市立大学の文学部で准教授をしております、高梨と申します。どうぞよろしく願いいたします。

え〜っと、このシンポジウム、「イベント下町エリアマネジメントー大阪とハンブルクの取り組みからー」ということで、午前中からいろいろなお話をさせていただきました。午前からお昼にかけて聞いてくださった方も多くいらっしゃると思いますけど、午前中どのような話があったのか簡単にまとめながら、まずは司会の特権ということで、それぞれのご発表者、提題者に対して簡単なご質問をさせていただこうと思っております。そのうえで、皆様から、提題者の方々からお答えをいただきまして、それを基にしてディスカッションを展開していきたいと思っております。もし時間が許しましたら、会場の皆様からご質問、ご意見をお受けいたしたいと思っておりますが、基本的にはこの前の方

で議論をさせていただきたいと思っております。どうぞ協力お願いいたします。

それで、まずシューベルト先生、最初のご発表でしたけれども、タイトルは「地区開発と住みごたえ—保全と増価を結ぶ都市更新—」というまあちょっと難しいタイトルがついておりますけども、お話は確かに理念的ではありましたが、かなり具体的な事例にも触れていただきました。**Gemütrichkeit**という、「住みごたえがある」というか「住み心地のよい」というの意味合いのドイツ語でございますけども、この言葉の意味から説き起こしていかれました。まあ **Gemütrichkeit** というのはドイツ語では、或いはドイツ語の語感のあるドイツ人の方には、昔ながらの何かちょっと古臭いというような、近代的な生活とはちょっと馴染まないような、古めのドイツの生活に対する一種の懐古主義的な、懐かしみというような感じを、まあ我々にもそういう意味合いをもっていると思いましたが、そういう言葉として使われてはいるけども、現在のザンクト・パウリという地区での都市開発においては都市の近代化ということに合わせて、近代化のプラス的な面も含めて **Gemütrichkeit** という言葉を改めて使おうと。それが一つのキーワードとなってハンブルクの近代化ということが進められているという。ハンブルクの一部の地区ですけれども、ザンクト・パウリというところの開発が行われているという、そういう現状についてご報告をいただきました。

えっと、どうでしょうか、一人ずつご質問をしていった方がよろしいですね。とりあえず私の方から一つ質問をさせていただきます。シューベルト先生の近代化についてのご説明の中では、いろいろなものが包括的に、総合的に近代化という事柄をめぐってまとめられていくのだということをお話しいただいておりましたが、その中で住むこと「住」と「商業」と、「工業」の三つがうまく混じりあった開発というようなお話がございました。このことは後程九条の問題とリンクしてくると思いますが、この場合、住むことはともかくといたしまして、工業あるいは商業というものが人々の生活の中でどのようにその生活とかかわっていくのかということについてお話していただきたいと思えます。

シューベルト：そういう施設、経済活動とどういう風に一緒にできるかという非常に難しい問題がありますけども、ラインケンさんも仰っていたように、住宅と商業活動というものが最近では非常に接近してきている。昔のように住宅と仕事場というものはっきり分かれているわけではなくて、ラインケンさんが示したように時間的に、部分的に事務所を借りたり、自分の自宅で仕事をするといったことが経済活動として多くなってきましたので、それは何をするかにもよりますが、昔ほどはっきりとした分化というものがないので、住と商が接近してきているというのが現在では起きてきてまして、それを一緒にするという事は昔ほど難しくなっていない時代になってきています。港町ということに関していえば、住宅と港湾機能を一緒にするというのは難しい部分がありまして、フェリーとかクルージング用の船と住宅を一緒に組み入れるというのは難しいと。特に騒音とかそういうものに関しては、非常に難しい問題があります。

レスナー：捕捉になりますが、仕事の世界そのもの自体が現在において過去とはかなり変わってきている。昔は仕事場は仕事場、住むところは住むところと、非常に棲み分けがはっきりしていたわけですが、最近では、いわゆる製造業を除けばできるだけ家の近くで働きたい、或いは仕事と自分の住むところ棲み分けをできるだけ無くしたいという風に変わりつつある、そういう傾向があるということも捕捉すべきである。

高梨：ありがとうございます。大変よくわかりました。いまお答えいただいたことについては後程取り上げることになるかもしれませんが、とりあえず先に進めたいと思います。

次は、一部の後半でお話しいただきました、Steg のレスナーさんのご報告の内容ですが、うまくまとめられないかもしれませんが、レスナーさんは Steg の活動について主にお話ししてくださったと思います。その Steg がどういうものかという、古い建物を買い取って改修して、新しくやりかえるという意味ですが、そして現代の生活に合うような新しい需要に対して提供していくと、いう風な活動をしていると。その活動については様々な局面がある。例えば住居であるとか、公共的な事務所であるとか、芸術家の活動の場であるとか、いろいろなものがあるというお話を伺いました。その際にポイントとなるのは、都市のイメージアップといった、言わばソフト面の改善といえますか、そういうものも含んで、総合的に開発を行っていく必要があるということも併せて仰ってくださいかと思えます。

そういうことなんですが、私の方からのちょっとした質問ですが、古いものをやりかえてですね、まったくそれを更地にして、また新しい建物を作るよりも、古いものをそのまま残して、外装を新たにして、内装を需要に合わせる、現代の生活に合わせるというリノベーションをしていくと。その場合、全く更地からやり直すよりもコストが 2 倍かかるということでした。そのように 2 倍のコストがかかるにもかかわらず、このような事業が成立するのは、そこに公的資金が投入されているという、そういう事実があるということでした。そのような公金を使ってできるという背後には、人々の文化を残そうとか、伝統を残そうといった考え方というか価値観というものがあるというお話もございました。

今のようなお話を聞いて、我々日本人はかなりショッキングというか、非常にいい意味でのショックを受けるお話だったと思うんですが、このように古いものを残すということに意味を見出すとか文化財としてそれを保全するとか、新しい意味合いを見つけてそれを残しながらまた使っていくという風な考え方は、いったいどのようにしてドイツの、ハンブルクのザンクト・パウリででもいいですが、醸成されることになったのか、といったことについても何かお考えがございましたら教えていただきたいと思えます。

レスナー：古いものを直すということは、当然その文化的背景があって、それと同時に政治決定でもある。この文化と政治は切ってもきれないものであることはお分かり頂けると思えますけども。ここ数十年間をずっと見てみると、人々の考え方もかなり変わって

きておりまして、どうしてもこれは壊すしかないというものは確かに壊して、更地にして、新しいものを建てるという風になるわけですが、国民の全体の中に、文化を残そう、文化を残すことによって、我々の未来を切り開いていく、いわゆる心の問題、精神の問題。その町には心と精神があってそれを保つのが文化であり、文化を保つということが逆に言えば心の問題、精神の問題であり、町の未来に心と精神を吹き込む、与えるということで非常に大切だという、一般的なコンセンサス、いわゆる暗黙の合意というのが成り立つのであります。

もう一つこのことに付け加えさせていただきますが、こういうあんまりいい評判の無い街に、こういう非常に保存状態を改革して、保存状態をよくするということであると、また市民側が自分の町に対する愛着というものが湧いてくるという利点も生まれてきます。

大場：今のことに関連しているんですが、場所の記憶ですとか、或いは地区のアイデンティティを保持したり、強化したりするために、文化的な、歴史的な建造物なり、その地域のシンボルになるようなものを保存するという事は非常に重要なことで、それは必ずしも歴史的なというか、近代よりも前の建造物に限らず、例えば他のドイツの地域の例で言いますと、規模は大きくないんだけど、地区のシンボルであった小さなサッカースタジアムをそのまま残しながら、それを地区の管理事務所として、或いはレストランをつけたりという、そういう事例もあります。

今のこともかかわるんですけども、やはり特にラインケンさんのザンクト・パウリのいろんな文化活動をご紹介いただいたわけですが、そういったときにつくづく思うのが、一つのきっかけとして、例えば食肉処理場の部分もそうだけでも、そういったところを保存することによって、合わせてその敷地にあるオープンスペースをイベントの空間として、いろんな形で利用することができる、そういうことなんですね。それは非常に強く感じまして、日本の場合はどうしてもそのような種地があって、縮退都市という概念を今朝お話ししましたけれども、実は日本の市街地は十分にコンパクトで、そういったところにさらに機能を集中させてどうするのか、という考え方が、いわゆるコンパクトシティ議論に対する大きな批判としてあるのですが、それはこの際本論ではないので置いておいて、その話で言いたかったのは要するに日本の場合は、何か新しいことをしようといった時に種地といいますか、オープンスペースが不足している。だからこそ、一方で多分使えるのはお寺だとか神社の中にある境内をもう少し、言わば地域の、もちろんアイデンティティのシンボルでもありますのでそういったところを壊すという発想はなかなかない、逆にそれをイベントのスペースとして活用していく、そういう風な考え方も当然考えられるのではないかと思います。茨住吉神社のことで、谷口さんから聞いたことがあります。

谷口：みなさんお持ちの地図の 8 番。市電発祥の地の茨住吉神社、当然これも江戸時代から歴史の古い地元の氏神様でございますが、以前は当然すべてオープンスペースとして

夜中でも入れる状況でございましたのですが。周辺が歓楽地であると、そういう風なことで、神社で立小便をしたりとかですね、いろんなことがあったり。町の中の治安の悪化ということで夜の一定の時間になると完全に閉ざされてしまいます。一切誰も入れないし、公衆トイレもないという状況が20年以上続いておりますが。これは世の中全体の治安の問題ということで、本来オープンにされなければならない神社がそういう形になるというのは、地元の方もやむを得ないという風に解釈をしているようですが。一般的なイベント、いわゆる子供会のイベントであるとか、夜の映画会をするとか、また祭りに関連するイベントをするという場合にはオープンにされておりますが、ただよる治安の関係で閉めてしまうというのはやむを得ないかと思います。

高梨：ありがとうございます。ちょっと話が思わぬ方向へ展開していったような気がしますが。とりあえず話を戻しまして、第二部の大場先生のご報告、これは第一部の最初に今回のシンポジウムの見取り図として、お話くださったことと合わせてですけど、今回は特に私たちのシンポジウムというのがドイツのザンクト・パウリ地区の開発というものを、例えば大阪の九条地区の開発のための先行事例という形で一つそこから、ザンクト・パウリの事例から学ぶことは何かないのかという風なことで行われてきました。

谷口：ドイツの方に一つ質問なのですが、先ほど地図のFの地点でですね、大阪開港の地、税関これ全部が役所これ役所が縦割りで土地の持ち方も違っているわけですが、いずれにしても、個々は国も府も市もトータルで開発をしないといけないということがあるわけですが、そういう窓口というのはドイツの場合は一本になっているのでしょうか。聞く役所によってうち分からん、うち分からん、といった状態なんですね、日本の場合は。

レスナー：私ども Steg、再開発業者はいろいろなところと話し合いとして、その問題解決するまで、解決の糸口を見つけるまでいろんな方々、関係者と話し合いを続けたいと聞けないということでありまして、一か所で済むということではありません。

谷口：状況は日本とあんまり変わらないんですね。

レスナー：話し合いは時として長くかかりますけども、たいていの場合は成功してます。ザンクト・パウリに関しまして、一つ参考になることを述べさせていただきますと、私どもは要するに記念物的なものを非常に大事にしてきた。記念碑的なものを。それは非常に文化的な重要な記念碑ではなく、それは何十年もかかって皆さんが育ててきたものです。それを見ることによって、こういうものがここにあるということが、再開発した時のもそれをもう一度認識していただくような形にしているということが、皆さんの町には一つの参考になるのではないかと思います。

高梨：ありがとうございます。本当に我々日本人にとって、大変参考になるようなお話がどんどん出てくるように思われますけども。はいはい、どうぞ。

大場：今の話と関連しまして、ぜひともハンブルクの皆さん、特にザンクト・パウリについてお聞きしたかったのは、そういったいわば歴史的な建造物の保全、それからイメージの改善ということと関連して、いつごろから、何をきっかけにして、若者だとか、ア

アーティストだとか、学生がやってきて、そういった人たちにとって人気のある地域になっていったのかということが、実際に昨年11月の私どもは行きまして、歩きましたけども、ほとんどそれがよくわからない。分からないというのはそういう風に変わっていたというのは分かるんだけど、何をきっかけにして、それが言わばまさにモーターは何だったかということを知りたいと思います。

ラインケン：アーティストっていうのはずっと昔からいるんですけども、ほとんど相手にはされなかったとか、意識はされなかったようです。その芸術家という者の価値というのは当時はそれほど高い社会的地位はなかったんですが、6年前に例えばユニバーサルという音楽業界の大手が、ハンブルクからベルリンに引っ越すという話がありまして。引っ越すということは700人分の職場がハンブルクからベルリンに移るということであります。だから音楽業界としてはその埋め合わせのために何をするかということが一つのきっかけでもありました。

10年ほど前までは、ザンクト・パウリは音楽のホットスポットであるということは我々自身も認識がなくて、建物の奥の方に録音スタジオがあったり、スタジオがあること自体が知られていなかったんですけども、これを見つけたのは逆に政治が、さっきも話にあるんですけども、それを発見するというそういう形になりました。で、昨年芸術家たちが空き家を占拠したという事件がありまして、それをメディアがずっと報道して、逆に報道が広まっていくことによってそういうものもあるという意識が逆に芽生えたわけです。

高梨：大場先生、よろしいですか？じゃ、すごく最近の話ということですね。

谷口：あのすみません。小さな、小さな動きなんですけど、地図上の3番の「フレック」と書いてある人形がありますが、その人形の頭付近ですね、古い長屋を、約100年近いほんとに潰れかけた長屋だったんですけど、そこを改装して、若い方々が居酒屋兼喫茶店を開業して、今やっております。明日先生方にもここをご案内する予定ですが、今のところ一軒だけですので、住民、周辺などのクレームはないと思うんですけど、こういう店が何軒か若い人を中心に増えてくるとすると、何かトラブルが発生するような気もするんで、観光にしる、開発にしる、常に光と影の部分があると思います。その陰の部分ができるだけ無くすようにするには、私たちはどういう心掛けをしたらいいのか、何か先例がありましたら教えてください。

レスナー：基本的にはそういう影の部分に対する有効なレシピはないということで、変化に対して辛抱強く皆さんにお話しをしていくということと、なるべく調和のとれたまちづくりになるように、説得していくという以外にさしたる処方箋はないというのが現実です。どの町にも影の部分は存在すると思います。

谷口：これは世界共通ということですね。ありがとうございます。

レスナー：先ほどより都市再開発の話をしておりまして、経済、お金の話をちょっとさせていただきます。古い建物を壊さずに、それを改装するとなると、時々倍以上のお金が

かかることがあります。30年ほど前に我々がこういうものを始めたころには、非常に批判にさらされたこともありました。短期に見れば、古いものを壊して新しいものを建てたほうが経済効率は良かったんですけども、それを改装して、再利用するということになりましたら、この古い建物が、今日では新しく建てた場合と仮定しましても、数倍の価値がある。経済的に短期で見るべきものでなくて、長い間でどういう価値を生み出すかということも重要になるかと思います。非常に建物としての財産が、長い目で見れば改装することによって経済効果も出てくるということです。

シューベルト：まずは話を二つに分けて、住居と住居でない建物についてお話ししたいと思います。まずは家のことに関しては、例えば長期的にみればということはありませんけども、今度は街全体として見たときには、プロジェクトによって非常に大きな構造改革がもたらされるという要因があります。だからまあもちろん街を変える、あるいは街の一部を変えるということは、その背景には、社会的背景がその町なり、その地区ごとにあるわけなので、ハンブルクでこうだったから九条でもこうでしょうということにはならない。だから、九条の場合は九条の社会的背景、その地元の事情というものを十分に考慮したうえで一番いいようにやっけて行かなければならない。それはどこについても言えるので、こうしたらいいですよ、というようないわゆるパテントのようなものではありません。

高梨：Vielen Dank。そうですね、色々議論が出て来ていますので、このまま展開していてもいいかなと思うんですが。先ほど谷口先生からのご質問で、若い人が街にたくさん入ってくると色々しき問題が起こってくるのではないかと、それをどういう風に防ぐべきなのかという方策について、ドイツの方にご質問されたわけですが。それに対してレスナーさんから、粘り強く人々と対話していくことが必要である、という話がありました。

で、確かに谷口先生がまとめられたように、問題が起こる、それに対して議論を重ねる、それによって問題を解決していくというプロセスは万国に共通かもしれませんが。例えば今シューベルト先生からご指摘がありましたように、町にはそれぞれ固有のバックグラウンドがあると、ということはそれをもう少し拡大してみますと、それぞれの国民にはナショナル・アイデンティティがあって、例えば日本人は議論が下手で、なかなかお互いに議論によって、意見をすり合わせるとか、譲歩するとか、相手を認めるというのが難しい面があるのではないかと。ドイツでこういう事例が成功しているということと、日本ではそういう動きがなかなか起こりにくいということは何かそういう背景が国民性の違いとして、もしかしたらあるのではないかなと思うんですが、谷口先生何か。

谷口：ちょっと付け加えて、具体的にドイツの方がどうしても日本の政治状況に若干入って行かなければ分りにくいと思いますので、申し上げたいと思います。一般的に欧州では税金を値上げするということに対して、また税金を費用の倍がかかるものでもかけてもそれほど大きなクレームが出ないということは、一般論で言うと国民が政府を信頼

しているからなんでしょう。多分日本の場合、一般論で恐縮ですけど、税金を値上げすると、また一般的に 2 倍のかかる無駄なことをするという事になれば、多分国民からクレームが出ると思いますが、それは本当に費用にしても値打ちにしても、本当に値打ちのあることを政治家がしてくれないから、信頼しないというのが日本では一般論ですが、その点ドイツではそういう政府が一般的に無駄なと思われることをやることに對して、大きなクレームが出ないということについてはどう思われますか？

シューベルト：これは日本だからこう、ドイツだからこうっていう、そういう風に、こちらとこちらっていう端的なものではなくて、やはりトップダウンもあればボトムアップもあるし、ハンブルクにおいてもいろいろなグループが集まって、それが寄り合い所帯として町が成り立っているわけで。当然我々が話をしたら、聞いてくれるグループもいれば、耳を貸さないグループもいるし、信頼を持たないグループもいるし、それをすべて認めながらやっていくという形でしかないの、日本ではこう、ドイツではこう、そこまで言い切れなと思います。

高梨：Danke Schön. まあこの議論は一つ落ちがついたともいますが、先ほどからそれぞれの提題者のお話をまとめながら、ご質問を私の方から差し向けるということをしておりましたが。大場先生は私の仲間ですので、ご質問しにくのですが、谷口先生のお話と、ラインケンさんのお話、ラインケンさんのお話はまだちょっとまとめておりませんでした。で、お二人に共通するような事柄があったかなと思いましたが、そのことを掘り起こしたいと思うんですが、例えば九条、谷口先生のご報告にありました事例の中で、例えばシュークリームが大阪ドームの形のものを作るとかですね、今まで存在していたものを新たな形にするなり、新たな意味を持たせるなり、状況に応じた変化をさせるということが九条では行われていたと。

で、ハンブルクのラインケンさんからの報告では、これも具体的なご報告がたくさんありましたけども、もともとあったものをやはり新しくする、状況に合わせていくという、そういう変化がやはり認められたかなと思います。確かにハンブルクのやり方は、実際にザンクト・パウリで行われている事例というのは、非常に包括的で、最初にシューベルト先生の、あるいはレスナーさんからお話にもありましたように、「包括的」という言葉が象徴しているんですが、色々な側面を兼ね合わせながら、しかも大規模にいろんな領域にわたって展開をしているということがあるかなと思いました。

それに対して九条の場合は、ある意味では観光資源を活用していく、大場先生からのご提題にもありましたように、観光資源を活用していくために、新しい USJ の建物ができるなり、大阪ドームができるなりという変化に合わせて、客足を導入するという、観光者をどんどん導入するという試みが九条ではなされていると思います。九条の古いものを新しい意味にやり替えていくという試みがどういうものなのか、もう少しほかの事例はないのかということをお私質問しようと思っていたのですが、先ほどの話の中で一つ事例を紹介して下さったかと思えます。

じゃあ一つ、私から谷口先生へ質問したいのは、13年間九条下町ツアーをなさって来て、人の流れを九条の商店街の方へ導入するという試みをしてらっしゃるのですが、それは実際にどの程度の功を奏しているのか、成功しているのかどうかということをお聞きしたいと思います。

谷口：それはマスコミからいつも聞かれる質問で、先生がなさっていたことがどういう経済効果がありましたかというも聞かれます。でもそれはそれぞれの個店、使っている個店については当然売上げが上がってることは事実でしょうし、3年前には大阪市は「ハードよりハート」と、どういうことかといいますと大阪市はもうお金がありませんので、USJとか海遊館とかそういうハードは作れない、建物は作れない。しかし、ハート、心を込めて今ある大阪の素材をそのまま心を込めて、ボランティアガイドさん、今日も私たちのメンバーが来ておりますが、ボランティアガイドさんがやれば経済効果も出てきますよ、という形で、皆さんの資料にも「大阪あそ歩」というツアーがですね、去年から大阪市をベースに、大阪観光コンベンション協会でも少しずつ効果を上げてきております。

九条で大きな効果といいますと、経済的には私たちのツアーをやったから閉まっていたシャッターが開いていくという風なことは、そこまではありませんが、マスコミを通じて、私たちのツアーや九条の町というのが、楽しい、面白い町やでと。少なくとも私たちがツアーを初めて13年間でおそらくツアーを含めてマスコミだけでもテレビ、ラジオ、新聞トータルにいうと、オーバーに言うとも100件近くはいろんな紹介をされております。そういう意味で本当は元気がないところもあるんですが、外から見た分には九条はなんか元気そうやねと見てくれる効果というのがあったかと思えます。

それと、過去で一番大きかったのは、これはある新聞社関係のツアー、が私たちもびっくりしましたが、中之島線ができたときに、中之島駅からこのいわゆる、今大阪市が提唱しております「海の御堂筋」が、中之島から安治川を経由して大阪港までを「海の御堂筋」構想の一環で、この川の周辺がこれから整備されていくんですが、そこを歩いて九条へ来るツアーが、主催者が1000人くらいなら九条の町でお昼ご飯食べられますね、といていたから、1000人くらいなら大丈夫ですよ。ということで各お店にツアーの方が来たら1割引してください、うどんも定食も一割引というお願いしたところ、なんと5000人も商店街を占拠することになりまして、1時間くらい、九条の商店街、正直言って普段まったくはやっていない、ごめんなさい。はやっていないお店も超満員になったという。これはもう具体例として小さな、小さな中のちょっと大きな経済効果ということもありました。ですから、そういう点では九条全体の経済効果を上げたという実績で、数字とかはとっておりませんので詳細は分からないのですが、少なくとも今まで九条は夜の街。いわゆる松島があったり、九条OSがあったり、何となく怖い町だと、夜の歓楽街の怖い町だというイメージが若干このツアーによって、マスコミの報道によって、明るく楽しく面白い町やでという風に変ったのではないかという効果はあったのではないかと

いかと思います。

高梨：今のお話し、最後のところはザンクト・パウリのレーパーバーンの事例とよく似ているなと思います。実際に九条とザンクト・パウリを比較するときの二つの地区の共通性ということが最初にあったわけですが、その意味合いの変化という意味でも共通するものがあると思いました。

谷口：これは不動産屋が言っていたのですが、このツアーを始める前は夜の街というイメージだったけど、こういうツアーを含めて九条の取材が増えるにしたがって、昼も夜も安心してできる街ということで、マンションに紹介する時も楽になったということという不動産屋もいました。正直言って、大阪ドームができるまでは九条＝夜の街。ということは、大阪に詳しい方々にご承知かとは思いますが、そのイメージが変わっただけでもうれしいと思っております。

大場：今のことをまとめると、九条は再三谷口さんが言われるように、かつては「西の心齋橋」といわれる非常ににぎやかな街だった。同様にザンクト・パウリも少なくともある時期までは、非常にブームの場所というところであったわけですが、その後の産業構造の変化によって、だいぶ衰退していくわけですね。そういう中でまた復活をしていくということですが、ラインケンさんにお伺いしたいのですが、先ほどの写真の中で、例えばレーパーバーンに、地域外あるいは世界から人々がやってくる、それは分かるんですが、地域外からの若者が実際にオープンカフェにやってきて、時間を過ごすというような、そういう風なことが出来上がってきたというのは大体いつ頃で、何がきっかけだったのでしょうか。一つイメージの変化のきっかけということに関してお伺いしたいと思います。先ほどの九条の話も含めて。

ラインケン：ザンクト・パウリの地区は南と北の二つにある程度はつきり分かれておりまして、レーパーバーンは南の方の地域で、夜の街というイメージが今なおございます。北半分の方はどちらかというと、クリエイティブな人たちが住・職一緒の方がそこに住んでいると。そういう人たちはなかなかレーパーバーンに来ないというのも事実で、ある程度棲み分けができている、ということになります。

大場：そうすると、いまのことと関連して、九条に比べてザンクト・パウリは地域が広いので、そう意味では単純に比較はできないと思いますが、例えばハンブルク市なり実際に事業に携わっておられる Steg の皆さんの発想で言うと、ザンクト・パウリの中をいくつかのエリアに分けて、それぞれの特徴を伸ばすという形で都市更新、地域の更新を進めていくというようなコンセプトで進めておられるのか、そういった場合に例えばいわゆる市区のマネジメント・ビュローですとか、地区のシュタットマイル・ビュロー（地区事務所）がどのような役割をその際果たしているのかということをお伺いしたいと思います。

レスナー：ふたつの局面があると思います。一つはザンクト・パウリのイメージですが、ザンクト・パウリ全体ということで、非常に生き生きしていて、躍動感に満ちて、すべ

てが速く変わっていく、そして面白いところというイメージです。まあラインケンさんがおっしゃったように、ザンクト・パウリはたくさんの方が集まったところでありまして、レーパーバーンもありますし、シャンツェン・フィアテルというところもありますし、カロリーネン・フィアテルというところもあって、それぞれの地区ごとにキャラクターも全然違いますし、アイデンティティも異なります。やっぱりそこに来る人なり住む人はそこにしかないものを求めてくる、そういう意味ではその町の地区ごとのキャラクターなりアイデンティティは非常に重要であると思います。

大場：地区ごとのキャラクターが大事だということはよくわかりました。その中で、シュタットマイル・ビュローの役割は如何でしょうか？

レスナー：まずその住民のできるだけ近いところで事務所を構えるということで、そこに起きた問題、一番難しいのは地元の人とコミュニケーションをとることが非常に難しく、些細なこと、すべての人とコミュニケーションをとることはもちろん全部はカバーできませんが、やはり住民のできるだけ近くにあって、その自分たちの現場のことが分かる、土地勘があるということが非常に重要であると考えます。やはり、住民にとって情報を得たりコミュニケーションをするのに、地下鉄に乗って40分も行ったりとかだと困るし、そうではなくてなんでも気軽に聞けるという雰囲気は非常に大切だと思います。

ラインケン：地区事務所っていうのは評議員を設けて、まあこの中には政治家もいますし、いろんな職業の人もいますが、基本的にこれはお金をもらわずに、ドイツの場合は市議員に次いでですけども、大体名誉職でお金もらってなくてやってる市議会なんで、まあそういう人が集まって、いわゆる地元の住民自治が日本よりも確固たるものがあると思います。

高梨：ありがとうございます。予定しておりました、時間を少し過ぎております。この際会場の方で、この点を質問して帰らないともう帰るに帰れないという方がいらっしやいましたら、おひとり、お二人ほど伺いたいともいますが、いかがでしょうか？ちょっといらんプレッシャーをかけましたので、遠慮してくださったのかなと思いますが、もし会場からないようでしたら、ご質問一つ頂いておりますので。

久坂斗了氏(UR)：いいですか？私は都市再生機構(UR)のものでして、いわゆるそちらの方の **Steg** の日本版にあたる都市再生機構という組織なのですが、先ほどの、再開発しなければならないところの市の役目って、要するに誰が引っ張っていくのか。午前中ちょっといなかったものですから、**Steg** の役割として、ただ単にそういう再開発をやっていくだけの事業体としての役割なのか。先ほど評議会という話がありましたが、そこに市が入ったり、市議員も入って、住民も入ってと、いう形になるんでしょうけど、そういう集合体というか評議会のような組織が全体を方向づけていく、**Steg** としてはその方向に則って、いわゆる事業をやるという話なのか、町をこうしようという話としては、市の役目とか、或いは全体で決めるというのか、集合体としてみんなの合意形成をそういう

形で持っていくという、評議会の役割もあるかもしれないけど、そこら辺をちょっとお伺いしたいです。

レスナー：ハンブルクには、そういう町の開発に関する独自の省庁がございます。で、市にはこういう風な方向付けでいきたいという都市計画がございます。で、そういうところでやっております。市がどういう開発をしたいかという条件にあてはまるようなところで、Steg もほかの開発業者と同じようにコンペに参加することになっております。2003年までは Steg はハンブルク市所有の公企業でした。2003年までは公社でございましたので、市からの委託は直接来てやっていたわけですが、それ以降は政治家とかいろんな委員会で話し合っ、それぞれの地区に合わせた再開発を行っております。Steg が今日一般の民間企業になったということは非常にいいことで、自分たちの持つクオリティというものをちゃんと証明できる立場になったと思います。市の再開発の計画で Steg に来るものは、受託するのは 80%くらいになっておりますが、なぜそんなに高い受注率なのかといいますと、Steg はいろんな分野において非常に広い範囲の人たちを構えて、いろいろ土地に合わせた再開発を供給できるような組織ができているということが一つあるかと思えます。ここで重要なのは再開発地域の再開発する者がよく知っておかなければならない。そしてその年の政治家にも密接な関係をしておかなければならない。それによそ者が来てそれにどういう再開発をするかという細かい手当てができないようでは困るので、やはり地域密接型の再開発は大変重要なことになると思います。

高梨：えっとありがとうございます。ほんとに時間が押しておりましたので、そろそろ閉めたいと思います。大場先生、何かまとめをお願いいたします。

大場：え～ふつう、シンポジウムは盛り上がった時に時間切れになるということが多いですが、これはそうではなくて、当初考えていた、必ずしも文化に基づくところまでどれくらい接近できたのかというのは結構難しいところかもしれませんが、一方でそのザンクト・パウリの事例と九条の事例からお互いの視点から、互いに評価しあうということを通じて、それぞれの地区のまちづくりに関する特徴、そしてなかなか今後目指す道っていうのは先ほども言われましたように、処方箋はないんだというようなお話は出ましたけれども、その一つのきっかけになるだけではなくて、更にその次の課題が少し見えてきた。そういう意味では、午前中からずっとこういう形で、いろんな報告を聞きながらディスカッションを行ってきました。

本日は、このような形で非常に長時間にわたりまして、しかも一方で具体的でありながらも他方で雲をつかむような、というか自分でやりながら行き先が見えなくなることが時々ありまして、そういう風なことを思いつつ、こういう風な場に出てくるといろんな活発な議論ができるというのが、それは非常に有意義な経験であったと思います。これを機会にまた引き続きこのようなテーマについていろんな催し等を国内、場合によってはドイツで展開してまいりますので、また今後もみなさん是非引き続きご参加いただければと思います。今日はどうもありがとうございます。

高梨: どうもありがとうございました。通訳のお二人にはほんとうにお世話になりました。

それではこれを持ちまして、本日のシンポジウムを終了させていただきます。皆さまありがとうございました。